

黎明館で出会う 陶板の世界

鳳凰(ほうおう) 苗代川焼

絵付け 十四代沈壽官 陶板製作 荒木幹二郎



黎明館2階講堂ホール壁にある薩摩焼の陶板は、松竹梅、牡丹、秋草が描かれています。牡丹の花は、島津斉彬の描いた牡丹の絵柄を参考に図案されたものです。



黎明館3階講座室付近の廊下に、薩摩焼の陶板があります。黒・白・赤・青・黄の5色で描かれた鳳凰は、開館40周年記念年間パスポートの絵柄にもなっています。

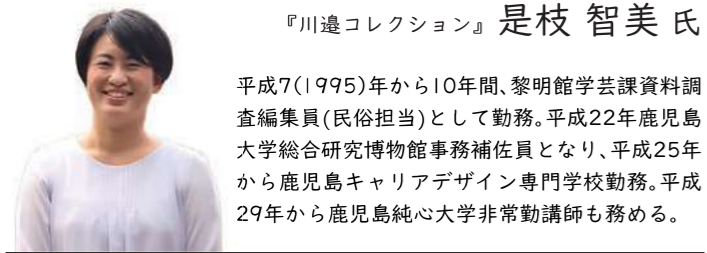


講堂入口ドアの取っ手部分が薩摩焼の陶板です。

黎明館40年の歴史 INTERVIEW そのとき、黎明館は

昨年度のたより黎明では、黎明館40年の歴史を年表にまとめて振り返りましたが、今年度はこれまでに黎明館と関わった方々にインタビューを行い、そのとき黎明館では何が起きていたのか、実際にその場にいた方の声をお届けします。

第3回 黎明館のコレクション



『川邊コレクション』是枝 智美氏

平成7(1995)年から10年間、黎明館学芸課資料調査編集員(民俗担当)として勤務。平成22年鹿児島大学総合研究博物館事務補佐となり、平成25年から鹿児島キャリアデザイン専門学校勤務。平成29年から鹿児島純心大学非常勤講師も務める。

県指定有形文化財「玩具コレクション」は、鹿児島市の郷土玩具研究者、故川邊正巳氏によって収集された、日本・中国東北部(旧満州地方)を中心とするアジア各地の郷土玩具約5000点のコレクションです。黎明館は、平成11(1999)年にご遺族からその寄贈を受けました。是枝氏は川邊邸を訪問して資料を受け取り、その整理にあたりました。

玩具コレクションは川邊邸の蔵に所狭しと陳列されており、美術品輸送の専門業者とともに1点1点慎重に梱包してトラックに積み込む作業に2日間を要しました。

資料を整理していく上で、川邊氏が各作品の産地や収集先などをまと

めた台帳があり、たいへん役立ちました。寄贈後は採寸と写真撮影を行い、台帳と作品を照合して資料カードを作成しました。当時はまだフィルムでの撮影でしたから、1点に割けるカット数は限られていますし、現像されてくるまで結果がわかりませんので、緊張しながらの撮影でした。

資料カードは作品の状態などが詳細にメモされ、写真に加え色鉛筆でスケッチが描かれています。

スケッチを行うことによって、写真では見落としがちな細部の特徴に気づくことができます。整理作業のために雇用されたアルバイトの方の協力も得ながら作業を進め、完了まで6年かかりました。



黎明館では川邊コレクションと呼んでいます。整理の結果、玩具4408点、関連資料が4335点、総点数は8743点となりました。

川邊コレクションの重要性は、玩具とともに関連する書籍や収集の経緯がわかる書簡などが遺されている点にあります。その整理の結果、点数が増えました。なかには収集家や好事家らが製作者に特注した作品と通常20冊ほどしか作成されない私家版の解説書がセットで遺るものもあります。また、国内でも有数のコレクションのひとつに数えられる満州の玩具コレクションにも、収集の経緯がわかる書簡などが多数あり、多様な人的ネットワークが見えてきます。

黎明館を離れた現在も、是枝氏は玩具研究を続けています。

日々館内の和室に籠っての作業は大変でしたが、作品に向き合うこと

活動報告

8月6日(日) 楽しい体験講座 夏休み宿題応援! 拓本をとろう



8月6日(日)に開催した「拓本をとろう」では、小学生を対象に、クイズを交えながら、日頃体験のできない拓本体験をしてもらいました。

8月20日(日) 親子で学ぼう! 黎明館キッズフェスタ 国の史跡 鹿児島城跡DEクイズラリー



8月20日(日)に開催したキッズフェスタでは、国の史跡である鹿児島城跡に関するクイズラリーを行いました。クイズを出題するのは、博物館実習の参加者です。

のできる貴重な時間でしたし、全国の玩具を所蔵する施設や研究者、コレクターの方々と知り合うこともできました。整理の過程で出会った様々な課題がきっかけとなり、今も研究に取り組んでいます。

『玉里島津家資料』 上村 文氏

平成7年黎明館資料調査編集員(歴史担当)となり、平成14年から『鹿児島県史料』の編さんに携わる。奄美大島在住中、瀬戸内町誌編集委員会編集委員、大和村誌編集委員会編集委員を務める。平成25年から鹿児島大学総合研究博物館常設展示室に勤務。



玉里島津家資料は、幕末薩摩藩の指導者島津久光が明治4(1871)年に興した玉里島津家に伝来した資料です。開館に向けた資料収集が進む中、昭和47(1972)年に寄託されました。記録によれば、文書類と書画軸・調度品類合わせて総点数12207点。5tコンテナ5台分が東京から運ばれたそうです。昭和58(1983)年の開館後は、まず玉里島津家の歴史に関わる文書類の解読が進められ、『鹿児島県史料』として、平成3(1991)年から10冊が刊行されました。平成21(2009)年からは4年間にわたり、国の緊急雇用創出事業の補助を得て、「玉里島津家資料整理業務」が行われました。上村氏は古文書を読むスキルを活かし2年間整理作業に携わりました。

メンバーには歴史資料についての知識や取り扱い経験をもつ人、古文書を読む人がいて、収蔵庫で資料の分量を測り撮影するチームと、事務所写真をもとに資料カードを作成し、データベース化を行うチームにわかれて作業が進められました。私は後者の担当で、書状や箱書きなどを読み、名称や宛所、年代などを記録していきました。

整理作業を経て、資料の数は24000点ほどに倍増しました。

受入時のリストは資料をだまかにまとめたものでした。例えば、数十点の書状が入った櫃を1点と数えている場合もあったので、実際に資料とリストを照合すると、なかなか合わない。初期リストから漏れているものはすべて新たな番号を起こしましたので、その結果です。

整理作業後、玉里島津家資料は館職員にとって格段にアプローチしやすくなりました。平成27年には寄贈となり、さらに積極的に活用されています。

データベース化により、いろんな角度から検索できるようになりました。異なる人が異なる視点でアプローチすることにより、多様な価値が見出され活用の幅も広がります。収蔵庫では、すべての資料が等質な状態で並んでいます。そこからピックアップして展示され、収蔵庫に戻るとまた等質な状態に戻る。いわば、資料の保存と活用の基盤を整える作業でした。

上村氏は、玉里島津家資料の特徴を次のように考えます。

玉里島津家資料は、近世期や幕末維新期の資料に光があてられることが多いのですが、近代期の玉里島津家の華族としての姿が立ち上がってくる家政資料や文化資料も数多く含まれています。印象に残っているのが、変化朝顔。江戸時代に流行し、明治時代にブームが再燃、久光の子で玉里島津家2代当主の忠清や、久光の嫡男で島津家29代当主となった忠義の子忠重も凝っていたようで、美しい図譜や品評会への出品記録、愛好家同士で朝顔を交換したことを記した日記もあり、興味深かったです。また、鹿児島市内には玉里邸が遺っていますが、そこでどのような暮らしや出来事があったのかをうかがえる文書とモノだと考えれば、より身近に感じられます。